

# 巻頭言

多文化共生研究所長  
小池康弘

35年前(1989年)、米国の政治学者で国務省スタッフでもあったフランシス・フクヤマ(Francis Fukuyama)が外交雑誌 *National Interest* に寄稿した「歴史の終わり」(原題は“The End of History ?”)は大きな論争を引き起こした。この18ページの論文はやがて彼の代表的著書『歴史の終わり』(原題: *The End of History and the Last Man*, Free Press, 1992)として世界中で出版された(邦訳は渡部昇一訳、三笠書房、1992年)。

冷戦が終結したこの時期、多くの人々が「自由民主主義」と「市場経済」が勝利し、これが最終的な政治の形、文化的進化の終着点になるのだと楽観的な未来を想像していた。中南米でもそうした流れが感じられ、当時外交の現場にいた筆者も「これからは多くの国が民主化され、世界的な対立は減っていくのだろう」などと考えていた。しかし、それがナイーブな考えであることはすぐに明らかになった。

それにしても、である。これほどまでに民主主義が後退し、権威主義が拡大し、戦争、人権侵害が起り、そして先進国も含め社会の分断が進むという状況は想像もしていなかった。スウェーデンのV-Dem研究所(2023年)によれば、自由で民主的な国・地域の数は2023年には60にまで減少し、非民主的な国・地域の数はその倍、119に増加した。同じ期間の比較(2003年と2023年)で、「民主化に向かっている」国は35か国から18か国に減少し、逆に「権威主義化に向かっている」国は11か国から42か国へ増加した。そして、世界で専制的な体制下で暮らしている人口の割合は2003年の50%から2023年には71%になったという。

この原稿を書いている2024年3月現在、ウクライナやガザの問題はまったく出口が見えていない。世界各国の移民問題なども建設的な解決方向ではなく、むしろ対立や分断の方向に進んでいる。世界は、かつてフランシス・フクヤマが指摘した「歴史の終わり」ではなく、むしろ時代が逆回転し、別の意味での「歴史の終わり」に向かっているようにさえ感じてしまう。

このような世界情勢の中で、今年(2024年)はパリ・オリンピック・パラリンピックが開催される。私の世代では1972年のミュンヘン・オリンピックで起きた「黒い9月事件」の記憶が強烈に残っている。「平和の祭典」が本当に無事平穏に開催されることを祈らずにはいられない。

最後に、2024年3月をもって研究所長を退任いたします。新しい研究所体制になって3年間、私の力不足で十分な活動展開ができなかったことをお詫びするとともに、所員の皆様、学外を含めた協力者の皆様に心より御礼申し上げます。後任の所長である亀井伸孝先生のもと、心機一転あらたな取り組みと研究所の発展に期待します。